

## 荒尾精：陸軍から日清貿易へ、日本の利益を考えたアジア主義者

パリ第七大学

グレゴワール・サストル

19世紀、アジアにたどり着いた欧米列強が新たな世界観をもたらしてアジアに大きな変化を起こした。1842年にアヘン戦争で中国がイギリスに敗北した。以前から中国は日本の「万里の長城」と見られ、欧米の侵略から日本を守る大国のはずだったが、「野蛮な」国家であるイギリスに戦敗し、日本或いは世界全体に自らの弱さを露見させることとなった。そして日本にとってはその勝利が欧米列強の強さの証となった。その結果、日本は国家として、特にアジア地域に関する立場を考え直さなければならなくなった。

明治維新以降、日本は欧米列強の世界観に影響を受け、欧米の技術と体制を取り入れた。欧米を中心とする世界体制のなか、欧米化を進めていた日本が中国を支援または支配していく必要があると考えた人々がいた。荒尾精(1859-1896)はその人物の一人だった。

1859年7月23日に名古屋で生まれた荒尾精は両親と上京した。金銭的な問題で両親は荒尾を管井家に預けることにした。管井の所で苦学していた荒尾は、訪れた士官から征韓論についての情熱的な話を聞き、アジア問題に関心を持ち始めた。『東亜先覚志士記伝』によれば「東亜諸国のために力を尽くし、我が帝国を東洋の盟主たらしめんと言う志を立てた動機で、彼は一世の生命として興亜主義の思想を実に萌芽を發した」<sup>1</sup>とある。この一文から荒尾精の思想を垣間見ることができる。1896年10月29日にペストによって台湾で38歳の若さで死亡するまで荒尾精は一生をかけて日本のために活動した。

軍人として中国での活動を始めた荒尾は貿易に活動を転向したが、その転向の原因には興亜主義が存在している。この論文は楽善堂と日清貿易研究所によって、日本の利益のために働き続けた荒尾精の活動と思想を紹介したいと思う。

### 1. 軍事教育と漢口の楽善堂

前述のように、征韓論によって荒尾精は東アジアへの関心を呼び起こされた。東アジアの中で中国がもっとも大きい国であり、荒尾はアジアの一つの大国として「改造」しようと考えた。しかし彼が中国で活動をするためには、手始めに戦術を学ぶ必要があると荒尾は思っていた。管井家で苦学していた頃、幅広い知識に触れた荒尾は、1878年に陸軍教

<sup>1</sup> 黒竜会編『東亜先覚志士記伝』（原書房1966）P321

導団に入学し、1879年に軍曹として卒業した。そして陸軍教導団を出て間もない1880年に陸軍士官学校の歩兵隊部に入学した。

陸軍士官学校で勉強していた時、荒尾は学校の仲間とともに、靖献遺言という書物に影響を受け、その名をつけることとなった靖献派と呼ばれる一派を創立した。靖献派の目的は、対論や本を共に読むことだった。この集団はよく宗泰院で荒尾精が借りていた部屋に集まり本を読んでいた。

1882年に荒尾は少尉として陸軍士官学校を卒業した。在学中に中国語を勉強し続けた荒尾は、卒業してすぐに中国へ赴こうと考えていたが、軍人としての実戦経験が必要と考え、1883年に熊本の歩兵第13連隊で士官として活動をし始めた。『巨人荒尾精』<sup>2</sup>によれば、熊本にいた頃に西郷隆盛の歴史に関心を持ち、彼の残した業績が荒尾に強い印象を与えたと考えられる。

陸軍士官学校から卒業する際、将校からの「士官なった何をする」という質問に対して、荒尾は「中国に行きたい」と答えている。その答えに驚かされた将校は荒尾に、「同級生のほとんどが欧米に行きたがるのに、遅れている中国に行きたいのはなぜか」と再び質問をした。以下は『東亜先覚志士記伝』に書かれている荒尾と将校のやり取りの一部である。  
将校：「支那に行ってなにをしようとするのだ？」  
荒尾：「支那へ行って支那を取ります。支那を取ってよい統治を施し、それによって亜細亜を復興しようと思います」<sup>3</sup>

荒尾は1885年に参謀本部の支那課勤務に命じられた。彼は支那課勤務の調査員としての立場を利用して中国についての資料を研究した。1886年の春に荒尾精は念願だった上海へ派遣された。荒尾は上海へ渡る直前、陸軍士官学校の在学中に知り合った、荒尾と同じく東アジアに関心を持っていた根津一に次の言葉を言った。

「俺が先に支那へ行くが、君も陸軍大学で高等戦術を学び、大学を出てから支那に來い、共に東亜のため働こう。」<sup>4</sup>

東亜のために働くのになぜ戦術が必要なのか。考えてみれば、東アジアよりもむしろ日本参謀本部のために働くのであれば、士官学校で学んだ戦術がかなり役に立つと考えられる。荒尾は上海にたどり着いてから岸田吟香<sup>5</sup>に会っている。岸田吟香は上海では欠かせない存在であり、荒尾は彼にある計画について話した。第二次世界戦争以前の書物によれば

<sup>2</sup> 井上雅二 『巨人荒尾精』 (佐久良書房、1910年)

<sup>3</sup> 黒竜会編 『東亜先覚志士記伝』 (原書房、1966年) P326

<sup>4</sup> 黒竜会編 『東亜先覚志士記伝』 (原書房、1966年) P335

<sup>5</sup> 1833-1905 岡山出身、東京日日新聞の記者、ヘボンの和英林集成、東亜同文会を創立

荒尾の計画に賛成した岸田が荒尾に漢口で楽善堂の支店を設立する任務を託したといわれている。

しかし大里浩秋の論文によれば、「陸軍参謀本部から出張した伊集院大尉が三河臥水の偽名で明治17年に開いたのが始まりのようである。」<sup>6</sup>とある。漢口の楽善堂を創立したのは軍人であったが、荒尾本人ではなかったという。大里氏はこの情報を外交資料館にあった関連資料「楽善堂実況探問の件」から引用している。1886年に同じ参謀本部から出張した荒尾精は、伊集院大尉から楽善堂の所長を引きついだ。「楽善堂」という書物と薬を扱う店は元々岸田吟香が設立し、荒尾は楽善堂の支店を使って活動を行っていたため、岸田吟香の支援を得たのは事実である。

漢口の楽善堂において、表では書物と薬の商売をし、裏では中国の地理、社会、経済、政治、軍、交通、商業などについての幅広い範囲の調査を行っていた。そのため荒尾は漢口の楽善堂で集めた仲間たちを中国の各地方へ派遣した。情報を効果的に回収するために漢口の楽善堂から派遣された者たちは中国各地に支店を設立した。軍事探偵の調査を行っていた彼らは中国風の辮髪にし、服も変えて中国人の格好をしていた。そうすることで中国人に混じって活動することが可能となったのである。調査で得た情報は陸軍調査本部に送っていた。

中国内部の状況をあまり知らなかった日本は、欧米列強の東アジア侵入に対抗するため、中国を日本と欧米列強との戦場の場とした。また、1888年にはロシアのシベリア鉄道と中央アジア鉄道の延長計画が荒尾達の耳に届いた。この計画によって、ロシアが日本の勢力圏内まで侵入する危険性を感じた荒尾達は、この計画に対抗しなければならなかった。

このロシア鉄道の延長を食い止めるために2人の「志士」が新疆と満州に派遣された。ロシアが新疆のイリ州に侵入したため、そこに楽善堂の一人の志士が派遣された。彼の任務とは、ロシア・中国間の交通を確認し、地理的な情報を集め、ロシアに対抗する中国人材をさがし、そしてロシアと中国の防衛対策を調査することが目的だった。

興亜を考え続けた荒尾は、楽善堂での軍人探偵活動によって中国の事情を以前より知ることができたが、中国改造という真の目的がなかなか結果を生み出せず、中国の事情調査から少し離れて日清貿易に身を寄せることとした。

## 2. 日清貿易研究所

---

<sup>6</sup> 大里浩秋『漢口楽善堂の歴史(上)』(The human studies kanagawa university 155, 59-87, 2005年) p62

中国を改造することが目的だった荒尾精は、日本、或は中国を強国にするために、日本と中国の間の貿易による強い提携を図った。中国と日本が切磋琢磨し、中国で貿易による日本の新たな力を見せつけることで中国を改造の道に導けると荒尾は考えたのである。そして、日清貿易研究所の目的とは、漢口の楽善堂で貿易に関して得た情報と経験を利用して、日本人の若者に中国の事情と商業を教えることだった。こうして日清貿易研究所で養成された日本人が中国で商売をしたり日中提携を高めるための活動を行った。

1889年の4月に帰国した荒尾は、日清貿易研究所の設立について日本の有力者と話し合った。荒尾が会った人物の中には、当時の総理大臣黒田清隆<sup>7</sup>、大蔵大臣松方正義<sup>8</sup>、そして農商務大臣岩村道俊<sup>9</sup>らがいた。彼らは日清貿易研究所の目的と荒尾の計画に賛同したのである。

日清貿易研究所の創立への支援を得た荒尾は、日本各地を訪れて若者を募集し始めた。1890年4月に帰京した頃には荒尾と500人の入学志望者が集まった。彼等の中から体格検査と知識試験を通った150人が入学の許可を得た。

1890年9月3日に横浜から出発した荒尾は、同9月9日に上海に到着した。日清貿易研究所は上海で創立され、開所式は1890年9月20日に行われた。開所式に際して荒尾は演説した。以下は彼の演説の抜粋である。

「...商業の全権を収めて我掌中に帰せんと欲せばかならずや東洋を凌駕し、欧米を睥睨し、厳然として商権を洋の東西に振うの素を養はさるべからず、我国の志士、苟も国家経済の前途を恐るもの、亦皆此に見る所なきにあらず...」<sup>10</sup>

荒尾たちは生徒の教育において、中国語はもちろん、それに加え、楽善堂の経験と調査で集めた資料と情報を生徒達に教えた。その教えは地理から歴史まで多岐にわたっていた。この知識を日本中に広めるために、日清貿易研究所は書物を編集した。1892年8月に第一書の『清国通商総覧』<sup>11</sup>が編集された。その中には地理、交通、財政、政治、雇用、商業について書かれていた。勿論、この書物によって日清貿易研究所の活動を知らしめるとともに新たな生徒を募集する事も一つの目的だった。

1890年に入学した150人の中から80人が卒業した。卒業して1年後の1894年、東学党の反乱が韓国で発生したことを発端に、韓国内における中国の支配に反感を抱いていた

---

<sup>7</sup> 1840-1900

<sup>8</sup> 1835-1924

<sup>9</sup> 1840-1915

<sup>10</sup> 井上雅二 『巨人荒尾精』 (佐久良書房、1910年) P50

<sup>11</sup> 日清貿易研究所 『清国通商総覧』 第1-2編、上海 (1892)

日本と中国の関係が悪化し、第一次日清戦争が開戦した。開戦の前、多くの日清貿易研究所の卒業生が陸軍に入隊した。荒尾はこれに賛成であった。彼は陸軍参謀本部に、どのように日清貿易研究所の生徒たちが役立つかを説明した。彼にとって陸軍はまだ中国に関する知識が足りないと考えたからである。陸軍には中国語が話せる人物が足りず、もし中国との戦争が起こった場合には中国語が話せる人物が必要になると荒尾は述べている。また、戦争となれば日清貿易研究所の卒業生達が中国の知識をもって陸軍の通訳としての役割を果たし、軍事訓練においては軍事探偵まで出来るとも述べている。

結局、日清貿易研究所で受けた教育は戦争のために使われたのである。以上のことから、中国で活動するのになぜ戦術の知識が必要だったのか、という問いに対しての答えは、荒尾が謳った興亜主義にあると考えられる。表では商売、裏では軍事探偵の楽善堂と同じく、興亜にも表には興亜、裏に興日という二つの面があった。

### 3. 興亜の裏には興日がある

アヘン戦争以後欧米列強がアジアに勢力を伸ばしたことにより日本は発展した。現代化というよりは欧米化の道を歩んだ日本は、新たに国家としての国際的立場を考えなおさねばならなかった。荒尾にとって、アジアと欧米の関係は次のようなものだった。

「欧亜の両陸は東西文華を異にし、黄白の二色は本来その種族を同じくせず、いわゆる、西力の東漸なるものは直に二者の競争を意味す。」<sup>12</sup>

この関係の中では、アジアは欧米の危険性に対抗しなければならなかった。アジアにとってというよりむしろ荒尾にとって、日本が欧米に対抗する必要があった。もし対抗しなければ日本が欧米の植民地になる危険性があると考えたからである。この危険性の中からアジア主義が生まれた。アジア主義を大きく分けると二つの思想が存在した。一つ目はアジアの国々を独立させ、外国に支配されない国家として支援すること、そして二つ目は、その反対、日本の利益のためにアジアの国々を利用することであった。

荒尾の立場を知るために、先に引用した荒尾と士官とのやり取りを思い出せば、陸軍士官学校から卒業した直後の若い荒尾の答えは自分の思想を明確に表していると思われる。中国を改造したいという思いをうかがい知ることにはできるが、その方法とはいったいどのようなものだったのか。中国を「取る」、「良い統治を施」したいという荒尾の言葉は、陸軍士官学校から卒業したばかりの人間からすれば、無理矢理中国を改造したいというように受け取られたのではないか。興亜の言葉を使ってはいるものの、彼は戦術をもって楽善堂で参謀本部のために軍事探偵として働き、日清貿易研究所の生徒に軍事的な訓練をさ

<sup>12</sup> 黒竜会編『東亜先覚志士記伝』(原書房、1966年)P361

せて第一次日清戦争に参加させたのである。結果として、荒尾は二つめのアジア主義により近い立場にある。

もし彼が中国とアジアのために中国に赴いたとしたら、なぜ日本の陸軍参謀本部の為に軍事探偵をしていたのだろうか。彼の資金調達を見ると、陸軍からは給料をもらい続けており、さらに日清貿易研究所を創立した時に日本政府と参謀本部から資金を受け取っている。政府は資金を出す事で、己の利益を考えていたのではないだろうか。

そして、興亜主義をもって、韓国と中国に対する意見はどのようなものだったのか。彼はその国々について次のように述べている：

「されば朝鮮の貧弱は、仮令朝鮮の為に之を憂えざるも深く我国のために憂えざるべからず、清国の老朽は仮令清国のために悲まざるも痛く我国のために悲まざるべからず。」<sup>13</sup>  
この引用の真意を明確にするには、ロシアに対する関心に目を向ける必要がある。

前述のように、韓国と満州は日本の安全圏内であり、そこに(?)ロシアが侵入した場合に日本が危険にさらされるという考えを持っており、そのためロシア鉄道の延長を防ごうとしていた。荒尾が韓国や満州へのロシア侵入を恐れた理由とはそこにあった。中国の安全を守ることによって、日本の安全を守ろうというのが荒尾のアジア主義であった。その考えでは、中国と韓国が日本にとって危険な国である。もしこの両国の弱さを利用して列強が侵入すれば、日本にも同じく危険が及び、日本の安全を守りたいのならば、満州、韓国、中国を守り続ければよい。そうすれば日本の安全が高まりアジアの安全が高まる、というのが荒尾の思想だった。

そして、興亜によって、(日本をこの危険性から守るために)、東アジアの国々の発展の為に働こうと考えていた荒尾は、日清貿易研究所時代も楽善堂と同じく、中国より日本の利益だけの為に研究所を立てた。そうでなければ、中国人がこの研究所で勉強できるはずだったからである。両国間の交流を高める目的をもっていた日清貿易研究所の卒業生は日本人だけで、彼らは日清戦争では日本陸軍に参加している。このように、荒尾のアジア主義は日本を守り強くするという目的をもっていた。

『東亜先覚志士記伝』によれば、日清戦争の直前に、戦争について荒尾が根津一、頭山満、佐々友房と話し合ったとある。荒尾と根津は日中の交流の悪化を恐れたが、結局は頭山と佐々友房の意見に賛成した。彼らにとって戦争は、中国の「無礼な行動」を防ぎ、日本の力と正義を認めさせる手段であった。結果として中国は、日本に負けた後、日本と以前より良好な関係を保つことができた。<sup>14</sup>

<sup>13</sup> 黒竜会編『東亜先覚志士記伝』(原書房、1966年)P361

<sup>14</sup> 黒竜会編『東亜先覚志士記伝』(原書房、1966年)P428

この考え方とともに、荒尾の思想では、興亜とは「宇内統一」<sup>15</sup>を可能とするための一つの手段だったと考えられる。

「我国をして綱紀内に張り威信外に加わり、宇内万国をして長く皇祖皇宗の懿徳を瞻仰せしめんと欲せば、先づこの貧弱なるものを救い、この老朽なるものを助け、三国鼎峙し」<sup>16</sup>というのが荒尾の思想だった。

荒尾の思想の中には天皇と天という概念がよく見られる。彼は「天に従うものは存し天に逆うものは亡び、天に従うものは成り、天に背くものは敗る」と述べている<sup>17</sup>。彼の思想では、中国と韓国を助けることが日本に天より与えられた任務で、天皇の国としての日本が「国家百年の長計」或は「六合四海を一統」することを望んでいた。つまり、日本の、あるいは荒尾たちの行為は聖なる行為であり、悪業ではないとする荒尾の思想は帝国主義と呼べるのではないか。

超国家主義者の頭山満は、荒尾を次のように評価している：

「千年歳に一人出る英雄の相を備えたといわれた。」<sup>18</sup>そして、「荒尾内閣を見たかった」<sup>19</sup>

玄洋社を設立した頭山満が荒尾精の内閣を見たかったというのは、おそらく頭山の思想が荒尾の思想と合致していたからだと考えられる。

## 結論

明治時代になり日本のアジアに対する態度は変化を続けてきた。欧米に対抗するために、日本にはアジアが必要だったが、その理由はどこにあったのだろうか。前述したように、アジア主義には二つの思想があった。荒尾精はその二つ目の思想に近かった人物だった。彼は興亜の為に中国に赴いても、活動を開始した頃からずっと日本の利益の為に苦労してきた。しかし彼にとってその行為は、アジアや全世界にとって有益だと考えており、また必要なことだったとも考えていた。彼にとって日本はアジアの盟主であり、日本の指導に従えば、欧米に対抗して平和を維持できると信じて疑わなかった。しかし、結局は欧米の

<sup>15</sup> 黒竜会編『東亜先覚志士記伝』(原書房、1966年)P360

<sup>16</sup> 黒竜会編『東亜先覚志士記伝』(原書房、1966年)P361

<sup>17</sup> 黒竜会編『東亜先覚志士記伝』(原書房、1966年)P362

<sup>18</sup> 黒竜会編『東亜先覚志士記伝』(原書房、1966年)P335

<sup>19</sup> 黒竜会編『東亜先覚志士記伝』(原書房、1966年)P395

圧迫を排除しようとした荒尾精が、欧米に代わって東アジアの国々を圧迫したという結果となったのである。

#### 参考文献

- 上村希美雄 『宮崎兄弟伝日本編上』 (葦書房、1987年).  
上村希美雄 『宮崎兄弟伝 アジア編上』 (葦書房、1994年).  
上村希美雄 『宮崎兄弟伝アジア編中』 (葦書房、1994年).  
上村希美雄 『宮崎兄弟伝アジア編下』 (葦書房、1999年).  
上村希美雄 『宮崎兄弟伝日本編下』 (葦書房、1999年).  
井上雅二 『巨人荒尾精』 (佐久良書房、1910年)  
吉田鞆明 『巨人頭山満翁は語る』 (感山荘、1939年).  
大川周明 『頭山満と近代日本』 (春風社、2007年).  
宮崎滔天 『三十三年の夢』 (国光書房、1902年).  
小山一郎著 『荒尾精: 東亜先覚』 (東亜同文会、1938年)  
小林健著 『興亜日本の三人男 : 頭山満・荒尾精・川島浪速』 .(アジア青年社、1943年)  
黒竜会編 『東亜先覚志士記伝』 (原書房、1966年).  
大里浩秋 『漢口楽善堂の歴史(上)』 (The human studies kanagawa university 155, 59-87, 2005年)